

では 36.3%で、2015 年までに 24.4%に減少した。考察：口腔関連 QOL は年齢とともに低下する傾向にあるが、本調査では 2014 年まで、年齢の増加に反して QOL は上昇していた。また、一人平均未処置歯数の 2014 年までの減少は、口腔関連 QOL の上昇に大きく寄与しているものと考えられた。2014 年までの QOL の上昇に反して、現在歯数が減少していたのは、治療により保存困難な歯が抜去された結果によるものと考えられた。歯周ポケット保有率の減少は、2012 年には観察されず、歯周治療の効果が齶蝕や抜歯などに比べ遅れて現れたためではないかと考えられた。

結論：被災地域住民の口腔関連 QOL は震災から 2014 年まで上昇したが、その後横ばい傾向で、これは地域の復興状況が関与しているものと考えられた。

6. 歯科治療中に生じた皮下気腫の 1 例

A case of subcutaneous emphysema during dental treatment

○武田 啓, 樋野 雅文, 小松 祐子,
角田 直子, 小野寺 慧, 川井 忠
宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野

【緒言】われわれは6の齶蝕治療中に生じた皮下気腫を経験したので報告する。【症例と経過】患者は61歳の女性。2019年7月、近在の歯科医院で6の齶蝕治療後に顔面の腫脹を認め、当科を紹介され受診した。顔貌所見では右側顔面の腫脹を認めた。口腔内所見では触診にて右側頬部に捻髪音を触知した。また、6頬側歯肉が軽度剥離していた。CT所見では右側の頬部、顎下隙、オトガイ下隙、側咽頭隙に連続する低吸収域を認めた。縦隔への進展を懸念し入院管理を行った。9病日目にCTを撮影し、気腫の吸収と縦隔への進展が認められないことを確認した。【結語】自験例では切削機器の圧縮空気が6頬側歯肉から頬部軟組織に入り込み、下顎下縁を経て各組織隙へと進展したと考えられた。切削機器などの使用時には常に皮下気腫の可能

性を念頭に置くことが肝要であると思われた。

7. 診断に苦慮した小児の重度歯周炎の 1 例

A case of Severe pediatric periodontitis that was difficult to diagnosis

○鈴木 舟, 小野寺慧, 川井 忠,
佐々木大輔*, 工藤義之**, 宮本郁也,
藤村 朗***, 武田 泰典****, 森川 和政****,
山田浩之

岩手医科大学歯学部顎顔面再建学講座口腔外科学分野, 岩手医科大学歯学部歯科保存学講座歯周療法学分野*, 岩手医科大学歯学部歯科保存学講座う蝕治療学分野**, 岩手医科大学歯学部口腔医学講座歯科医学教育学分野***, 岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座臨床病理学分野****, 岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座小児歯科学・障害者歯科学分野*****

緒言：われわれは、小児期の重度歯周炎の1例を経験し診断に苦慮したので報告する。

症例：患者は12歳の女児で、7部歯肉の腫脹を主訴として2016年2月に口腔外科を受診した。既往歴に特記事項を認めなかった。口腔内所見では、67口蓋側歯肉に瘻孔が認められた。7は癒合歯であった。67は電気歯髄診に陽性反応を示した。歯科用コーンビームCT像では67の歯槽骨に著しい骨吸収を認めた。上顎骨腫瘍を疑い生検を行ったところ、病理組織学的に慢性炎症と診断された。以上より67に局限した重度歯周炎と診断した。経過観察中に6の根尖部の骨吸収は自然に改善したが、6の遠心部と7の骨吸収は残存していた。2018年9月7を抜歯したところ歯周炎は治癒した。

考察：癒合した歯根の形態異常と歯周炎についての関連性についての報告はなかった。本症例も複雑な根面形態を有しており、年齢が12歳と若く、稀な症例であると考えられた。患者の年齢および発症部位から侵襲性歯周炎も考えられたが、細菌検査と詳細な家族歴の聴取を行っていなかったため、確定には至らなかった。7の近心口蓋側の歯槽骨吸収が著しく、抜歯が適切な処置であったと考えられた。